

## 「私と酪農」

神奈川県立中央農業高等学校  
畜産科学科2年

田中華

私の住む伊勢原市は神奈川県のおぼ中央に位置し、人口は約10万人で、東西間に東名高速道路、国道246号、小田急電鉄が走っています。東京からは東名高速で30分、小田急線で新宿から60分、距離にして東京から50km、横浜から45kmの位置にあり、首都圏の近郊都市として重要な役割を担っています。総面積のうち山林原野が約1/3を占め、その恵まれた自然環境と温暖な気候から、県内はもとより広く関東一円の人々の憩いの地となっています。丹沢大山国定公園の一角に位置するシンボル「大山」を頂点として、東部には豊かな平野部が広がり、鈴川、善波川、日向川、歌川といった清流が大地を潤しています。伊勢原市の乳牛飼育頭数は神奈川県下では第1位、酪農家戸数も第2位と県内では酪農が盛んな地域です。酪農以外の農業では米、みかん、梨、ぶどうなどの栽培がとても盛んです。

我が家の牧場での飼育規模は、総頭数42頭、そのうち27頭が搾乳・乾乳牛であり、残り15頭は育成牛です。飼育形態は対頭式つなぎ牛舎で飼槽との境に段差がないフラットな牛床となっています。搾乳施設は、4頭シングルのアプレストパーラー方式で、ウォークスルーとなっており、牛舎の改装が途中なので、一頭ずつ連れて、パーラーに行くために27頭搾乳するのに2時間程度かかります。27頭で2時間かかるのは、一頭ずつ連れていくのに時間がかかるので、私が見ても大変な労力がかかっていると日頃から思っていました。

現在、父と母の2人で管理しています。飼槽、尿溝の清掃、搾乳は2人でおこない、母は哺乳牛、育成牛の管理作業、父は堆肥処理を分担しています。私が仕事を手伝うときは母のおこなっている哺乳牛の管理作業をおもに、手伝っています。私は2人で働いている姿は大変そうにみえますが、2人で管理するにはちょうど良い頭数だと両親が言っているのを聞いて、納得しています。

給与飼料の内容はアルファルファとスーダン乾草を中心に配合飼料、フレークコーン、ビーフパルプ、各種添加物に加水して混合したTMRをイセハラフィードセンター（農事組合法人）にて調合してもらっています。乾乳牛にはTMRの量を減らして、スーダンの乾草を与えています。

2006年度の総出荷乳量は23万kg、1頭の出荷乳量は約9000kg。収益500～700万円となっています。両親によればこの頭数でこの数値は、望ましいもので、満足しているそうです。話を聞いている母の満足そうな顔をみて嬉しくなりました。

経営方針である少数精鋭を行うために、基本的な飼育方法を守って牛の能力を100%発揮できるような管理をするよう努力しています。具体的に行っていることは、個体の

---

乳量を高めるために乳牛を健康な状態に保つ、特に分娩前後の大切な時期をベストなコンディションに保つため、急激な飼料の増給や変更をすることなく、一頭一頭の牛をよく観察しその牛のコンディションにあわせた給与をすることを心がけています。そして、コンディショニングや飼料給与に注意し、次回の繁殖が順調にいくように意識しています。乳牛の改良目標として長期の展望にたって足腰の強く、連産がしっかりできるもの、また乳房のバランスの良いものなど遺伝的に改良するため雄牛の選定を一生懸命考えています。

ところで、近い将来我が家の牧場が、第二東名高速道路建設用地となるため別な土地に移転し、牛舎を新しく建築しなければならなくなりました。これは我が家にとってとても大きな出来事です。そして移転を機にフリーストール・ミルクングパーラー方式にて飼育するので現在の飼育方法とは違ってきます。新牛舎での飼育は、一頭あたりの乳量を多くすることまた乳質を良くするためにできるだけ乳牛にストレスを与えない飼育方法について検討しなければならないと考えています。

例えば、牛のコンディションにあわせて飼料の増減することや発情発見、病気の発見などの個体管理に眼がいき届くのか。また、つなぎ飼育からフリーストール飼育の新牛舎にどのように慣れさせるかなど今までとは違うので、不安があります。その反面、つなぎ飼育からフリーストール飼育になるので牛が自由に動きまわられるし、自由に飼料を食べられるのでストレスも少なくなるだろうと思います。そして、今まで牛を一頭ずつ連れてパーラーに行っていた労力が軽減できることが楽しみでもあります。

私の将来の夢は、自分自身の家であるこの我が家の酪農業を継ぐことです。酪農家を継ぐということはとても大変なことだと私は思っています。小さい頃から両親の仕事をみながら育った私は、“将来の夢”、そう言われたときに一番に頭に浮かぶのが酪農家になるということでした。しかし、両親が毎日大変そうにやっている仕事は私にもつとまるのだろうか、そもそも本当に私は酪農の仕事がしたいのだろうか、そう考えるときもありました。しかし、中央農業高校に入学し酪農について勉強していくうちに、もっと色々なことを知りたい、もっと動物に関わっていききたいと次第に思うようになりました。両親の後を継いで酪農家になろうと決心するのはきっと今だ、今しかないと感じたのです。高校に入ったことによって酪農をやりたいと強く思うようになったのです。

後継者として酪農をやると決めましたが、高校卒業後すぐには思っていませんでした。すると、母から大学生のときに行動学の研究をしていた話を聞き、私も大学に進学して行動学の勉強をしようかと漠然と考えていました。しかし、高校の先生からカウコンフォートといって、牛が快適と思える環境を管理者が確保することが大切だということを教わりました。乳牛の行動について管理者がすべて理解できれば、どのような環境が乳牛にとって一番快適なのかがわかるのではないかと思います。そうすればストレスもなく病気も少ない、し

---

---

かも乳牛の能力を十分に発揮でき、乳量の増加や乳質の改善に繋がるのではないかと考えたのです。そして、新しく導入するフリーストール牛舎と乳牛の快適性もうまくあてはまるのではないかと気づきました。

この考え以来、大学進学は、酪農を専門的に学べる北海道江別市にある酪農学園大学酪農学部酪農学科を目指しています。そして、家畜行動学の研究室に入り、そこで行動学をもとに乳牛にとって快適と思える環境とは一体どのようなものかを研究していきたいと強く思うようになりました。現在そのために高校の勉強を一生懸命取り組んでいます。

私の目指す酪農経営は、現在の経営方針である少数精鋭の考え方を受け継いでいくことです。それは、少ないながらも基本的な飼育方法を守って乳牛の能力を100%発揮できるような管理をすること、乳牛一頭一頭への熱い思いと個体管理をしっかり行っていくことです。加えて今までの高校での勉強やこれから大学で学ぶ行動学や飼育管理などの勉強を生かし、いかに牛にストレスを与えずそして我が牧場にあった最善の管理方法を見つけて乳牛の立場にたって経営をすすめていくことです。

そこには、健康な牛からしかおいしい牛乳を生産できないのではないかと強い思いがあります。健康な牛とは、病気ではないというだけでなく牛自身が幸福でないといけないと思います。「家畜の福祉」という考え方があり、それは牛の幸せを考えること、しかし家畜だから野生動物とは違い、酪農経営をしなければならない中で、牛の幸せも両立できる方法がないかと考えています。つなぎ牛舎は多くの牛を飼うことができるし、個体管理もしっかりできるけれど、牛の幸せを考える中では「自由」がないように思います。神奈川は土地の価値も高く、その中で経営をすることを考えるとつなぎ牛舎が良いかもしれないけれど経営と牛の幸せをどう両立していくかを追求していきたいと思っています。そして、この神奈川県で酪農専業によって生活できる経営をしながらおいしい牛乳、生産物をつくっていける素晴らしい牧場にしていきたいと考えています。

また現在は、糞尿を平乾と温風を利用した堆肥舎で堆肥化しています。この方式は神奈川県で一例目です。この堆肥舎の方式のいいところは、温風で乾かすので、冬場でも発酵がよくすすむことです。できた製品は耕種農家に販売しようと考えています。これによって、経営的にも利益がでますし、その上伊勢原で特産の梨やぶどうの栽培に役立つことができます。

このように父、母の考えを受け継ぎながら、乳牛一頭一頭のことを思いながら地域の農業を発展させていくような牧場を目指しています。そして都会化がされていく神奈川県の中で酪農を続け、「近くに牧場があって良かったね」と言われるような、牧場にしていきたいです。

今我が家の牧場でおこなっていることだけではなく、自分で積極的に色々なことに挑戦

---

や取り組みをし、大学や先進農家、私の目指している酪農と志を同じにする農家から学んだことを我が家の牧場にあった形で取り入れていきたいと考えています。これからも後継者としてしっかり頑張っていきたいと思います。

---